



令和3年9月14日  
内閣府（防災担当）

## 令和3年防災功労者内閣総理大臣表彰の受賞者決定について

標記について、別添のとおり受賞者が決定しましたのでお知らせします。

※ 防災功労者内閣総理大臣表彰は、『「防災の日」及び「防災週間」について』（昭和57年5月11日閣議了解）に基づき、災害時における人命救助や被害の拡大防止等の防災活動の実施、平時における防災思想の普及又は防災体制の整備の面で貢献し、特にその功績が顕著であると認められる団体又は個人を対象として表彰するものです。

### 【本件問合せ先】

内閣府政策統括官（防災担当）付

参事官（総括担当）付 浪越、内野、鈴木

電話：03-3593-2844（直） FAX：03-3503-5690

## 令和3年 防災功労者 内閣総理大臣表彰 受賞者名簿

### ○ 個人

#### 〔防災体制の整備〕

名古屋大学大学院環境学研究科付属地震火山研究センター教授

山岡 耕春

(愛知県)

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院副院長兼救命救急センター長  
兼医療社会事業部長

花木 芳洋

(愛知県)

西日本工業大学名誉教授

玉田 文吾

(福岡県)

九州大学教授

三谷 泰浩

(福岡県)

#### 〔防災思想の普及〕

壬生町女性防火クラブ顧問

大畑 トシ

(栃木県)

一般財団法人総合初等教育研究所参与

北 俊夫

(埼玉県)

### ○ 団体

#### 〔防災体制の整備〕

東京都赤十字救護ボランティア活動推進協議会

(東京都)

#### 〔防災思想の普及〕

岩根自主防災会

(愛知県)

御岳防災会

(愛知県)

今熊野学区自主防災会

(京都府)

上後藤二区防災会

(鳥取県)

徳島市津田中学校

(徳島県)

宮城県多賀城高等学校

(宮城県)

横浜市立太尾小学区防災まちづくり連携

(神奈川県)

豊橋手話通訳学習者の会・豊橋手話ネットワーク

(愛知県)

チームサツキ

(岡山県)

浜郷地区まちづくり協議会

(三重県)

海南市立下津第二中学校

(和歌山県)

心のあかりを灯す会

(東京都)

河内地区自主防災会連合会

(広島県)

〔災害現場での顕著な防災活動〕

(令和元年房総半島台風、令和元年東日本台風)

千葉県電気工事工業組合

(千葉県)

(令和2年7月豪雨)

熊本県警察本部

(熊本県)

大分県警察本部

(大分県)

福岡県警察本部

(福岡県)

下呂市消防団

(岐阜県)

大牟田市消防団

(福岡県)

みやま市消防団

(福岡県)

球磨村消防団

(熊本県)

人吉市消防団

(熊本県)

八代市消防団

(熊本県)

芦北町消防団

(熊本県)

大石田町消防団

(山形県)

新庄市消防団

(山形県)

飯田市消防団

(長野県)

相良村消防団

(熊本県)

伊佐市消防団

(鹿児島県)

第十管区九州大雨災害対策本部

(鹿児島県)

第8師団災害派遣部隊及び同協同部隊・同支援部隊

(熊本県)

(令和2年台風第10号)

宮崎県警察本部

(宮崎県)

椎葉村消防団

(宮崎県)

(令和2年7月豪雨、令和2年台風第10号)

国土交通省緊急災害対策派遣隊

(東京都)

内閣府沖縄総合事務局緊急災害対策派遣隊

(沖縄県)

国立研究開発法人土木研究所緊急災害対策派遣隊

(茨城県)

(令和2年8月大規模工場火災)

大田原市消防団

(栃木県)

以上 44件(6個人、38団体)

功 績 概 要

団体 [防災思想の普及]

推 薦 者	消 防 庁
ふ り が な 名 称	かいなんしりつしもつだいにちゅうがっこう 海南市立下津第二中学校
所 在 地	和歌山県海南市
代 表 者 (団体での職名)	校長 <small>あぶらや</small> 油谷 <small>まさゆき</small> 正之
功 績 の 概 要	<p>海南市立下津第二中学校は、生徒がボランティア活動に積極的に取り組むことで市民性を身に付けるとともに、地域を知り、将来の災害に対応できるよう取り組んでいる。</p> <p>また、東日本大震災を教訓とし、南海トラフ地震に備え、海南市や海南市教育委員会と連携して避難体制の見直しを行うとともに、これまで10年にわたり、津波避難訓練や防災学習を積み重ね、中学3年間を通じて、生徒が自ら命を守るための知識と行動力を身に付ける取組を実践してきた。</p> <p>令和元年度には、海南市や海南市社会福祉協議会、地域住民、校区の小学生、福祉系専門職、学生、ボランティアと連携し、南海トラフ巨大地震を想定した津波避難訓練、避難所運営訓練、災害ボランティア活動訓練を実施した。</p> <p>また、避難生活や災害関連死、復旧・復興期の「くらし」について学び、東日本大震災当時に小・中学生だった学生たちを全国から約50人招き、東日本大震災や南海トラフ地震について語り合うグループワークを全校生徒で実施し、成果発表を行った。</p> <p>これらの取組を通じ、生徒たちは、少子高齢化や地域活性化などとともに、災害を複合的な地域課題の一部と捉え、生徒自身が地域の一員として災害を自分ごとに捉えることができるようになった。</p>